

やまと 民俗への招待

鹿谷 熱

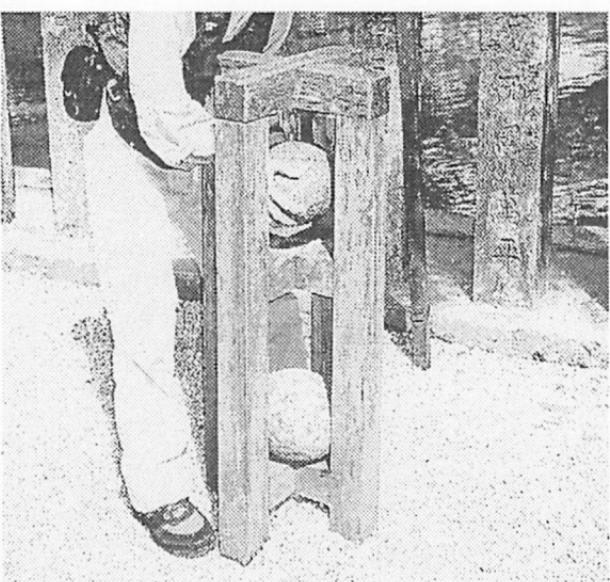
龍泉寺のナデ石を知ったのは、県教育委員会が行った野迫川村民俗資料緊急調査の報告書だった。1971~72年に行われた貴重な調査で、保仙純剛氏が野迫川村の中地区の富家氏宅に神意を問う石があると報告し、天川村龍泉寺のオイトシボと呼ばれる石についても「可愛い可愛い」と言って撫でて挙げると軽いし、憎いと言って打って挙げると重いと洞川の人は言っている」と言及している。石を持ち上げた時の感覚が重いか軽いかで神意を問うのでは、こうした石をオモカル石と呼ぶが、龍泉寺のナデ石はその変化

だろうという。

オモカル石は名古屋の大須観音や大阪の四天王寺六時堂でも見たことが

龍泉寺のナデ石。木梓は後に設けられたもの
■筆者提供

こうした石は、金峯山寺藏王堂の前の広場や大峯山寺にもかつてはあり、「玉石」と呼ばれていた。



ある。飛鳥坐神社の石段を登った所にある四角い鉄のかごに入ったクツナ石も同類だ。伏見稻荷大社では、石灯籠の頂上部の宝珠がオモカル石となり、人が持ち上げるので、そこだけ黒ずんでいる。

大峯奥駈道を歩いた年

には、熊野参詣道小辺路も踏査したので、この時

に野迫川村の富家氏宅も訪れた。同家はこの地を開いた家の一つで、その昔、京都から稻荷の祠

を背負つてやって来ただ

いたといふ。床の間には三角す

ぐらの丸石を安置して

いたといふ。

辺りから鍛冶屋や博労たちが商売や病氣のこと

で、こうした石をオモカル石と呼ぶが、龍泉寺のナデ石はその変化

奥駈道から丸石信仰

所代表

ないだろうかと思つてゐる。(奈良民俗文化研究所代表)

■隔週掲載